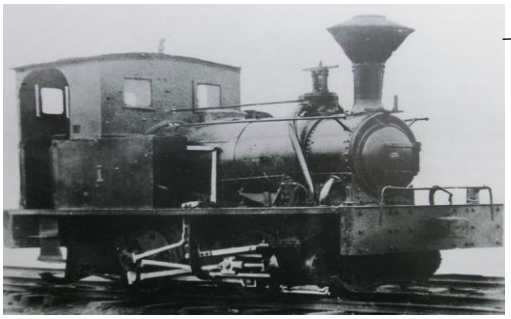
6 土匪の襲撃とマラリア

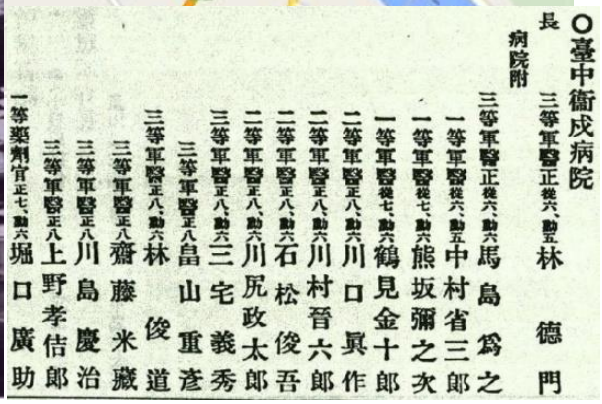


哲太郎が新竹まで乗車した騰雲号
（「台湾鉄道の蒸気機関車について」引用）

土匪の襲撃を受けた伯公坑
明治37年撮影（苗栗老照片引用）

伯公坑停車場　撮影不明
（「苗栗老照片」引用）

哲太郎が入院した鎮瀾宮　昭和11(1936)年撮影
（「大甲鎮志」引用）



○臺中衛戍病院
長　三等軍醫正後六、勲五　林　德　門
病院附
三等軍醫正後六、勲六　馬　島　爲　之
一等軍醫後六、勲六　中　村　省　三　郎
一等軍醫後七、勲六　熊　坂　彌　之　次
一等軍醫後七、勲六　鶴　見　金　十　郎
二等軍醫正八、勲六　川　口　眞　作
二等軍醫正八、勲六　川　村　晉　六　郎
二等軍醫正八、勲六　石　松　俊　吾
二等軍醫正八、勲六　川　尻　政　太　郎
三等軍醫正八、勲六　三　宅　義　秀
三等軍醫正八　島　山　重　彦
三等軍醫正八、勲六　林　俊　道
三等軍醫正八　齋　藤　米　藏
三等軍醫正八　川　島　慶　治
三等軍醫正八　上　野　孝　佶　郎
一等藥劑官正七、勲六　堀　口　廣　助

陸軍台中衛戍病院医師
（「総督府職員録」引用）

哲太郎は、酒店閉店後、新たな職を求めて熊本県人が多く住むという台中に向いました。新竹まで汽車で、そこから徒歩で台中の当時縦貫鉄道の終点であった北部山中の伯公坑（現勝興）に住居を求め、建設中の台湾縦貫鉄道工事の御用達商として生計を立てることになりました。ここで女中として熊本県河内村出身の島村袖(しまむらそで)を雇いました。ある夜、土匪（どひ）の襲撃に遭い財物は取られ、危うく命を落とすところでしたが、袖の機転により助かりました。しかし、マラリヤに罹（かか）り危篤（きとく）に瀕し、担ぎ込まれたのが大甲の媽祖廟（ばそびょう）である鎮瀾宮（ちんらんぐう）の陸軍衛戍（えいじゅ）病院でした。九死に一生を得た哲太郎は袖の看病を受け鎮瀾宮で療養につとめたのです。